きすふれ！　５

きす☆ふれ　5

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20739213

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 本番無し, 最霊, ショウ霊

無知シチュ師匠の総受けです。攻めたちが師匠を色々そそのかします。今回は本番無し、エク霊、モブ霊、ヨシ霊、最霊、ショウ霊、言葉責めが有ります。
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

きす☆ふれ　5

性欲が無いかもしれない、という霊幻。
それに対してエクボ、茂夫、ヨシフは困惑していた。
最上だけが冷静に質問を続ける。
「個人的な事情を聞いてしまうが、ムラムラしたりしないのかね？」
「うーん、中学生の時は少しはしてた気がするけど、ほら、自慰が上手くできないだろ？だからムラムラしても、もどかしいだけだから、意識して興奮しそうな物からは距離を置いていた、気がする」
なるほど、と最上は霊幻を安心させるようにしっかりと頷く。
「そうこうしているウチに、性欲そのものが減退して行った、と」
「そうなんだよなー……。実はちょっと前まで、俺って子供残せない身体なんだなー、って諦めてたんだよ。まあめちゃくちゃ不妊治療とか……睾丸からの精子採取？とかすれば何とかなるのかもしれないけどさ。恋人に『勃たないかも』『性行出来ないかも』だけどいいか？って訊くのも嫌だし、付き合う前に言うのはもっと嫌だし、……で、ある程度１人の人生を覚悟し始めてたんだよ。けどさ、」
ウロウロと恥ずかしげに霊幻の視線がさまよう。
「エクボとキ、スフレになって。ち、ちゅーしてるウチにさ、……なんだかそんな気分になって、あー、人肌恋しいなー、って気分になって。勃つの見てたら、これイケんじゃね？って気分になって、そんでエクボに相談したら、」
「ちょ、っと待ってくれ」
最上は目を細めて笑みの形に歪める。悪霊化して黒く染まる眼窩を霊幻に見られないように。

『キサマ！！！！新隆くんとセフレだと！？！？良くも私のモノに手を出してくれたな！！！！』
エクボは顔を歪めたが、口を動かさずに応えた。
『うるっせえな、わざわざ念話で話しかけてくんじゃねーよ。セフ

レじゃねーよキスフレだ。あと誰がテメェのモノだ調子乗ってんじゃねーぞ若造が』
キョトンとする霊幻を置いて、場の殺気が膨れ上がる。
『私を若輩者扱いとは、身の程知らずにも程があるな。新隆くんが怒らない程度に躾けてやろうか？キスフレとは……ああ、いい。キミの記憶を見せて貰った方が速いから、説明は結構』
『……っ勝手に頭を覗くんじゃねえどっちが不躾だ！いつの時代も力に溺れてるヤツなんざ、いくらでも搦め手で足元掬えるんだよ。テメェこそ弁（わきま）えろ』
キスフレ、の内容を咀嚼して。
最上は眉を僅かにしかめる。
『……セフレと変わらんだろ、これは』
『そりゃあ古い価値観ってやつだな』
『いや僕もそう思うんだけど……』
『俺もだな。まあ、霊幻がセフレ作ってたよりはマシだが』
『おいおいおい落ち着けよ？霊幻をそそのかした俺様にノッてきたのはお前らだろが。今更霊幻に真実を伝えて、寄ってたかってセクハラしてましたって言うのか？俺様は嫌だぜ。お前らだけ嫌われろ』
『それに……射精障害のことを、キスフレだから相談してきた、という所もあるだろう。少なくとも新隆くんの悩み事が解決するまでは、騙しておいた方がいい』
戸惑いながら最上がエクボに追従する意見を出してくる。
『……最上さんがそう言うなら』
『オイシゲオ俺様の扱い』
『俺も、最上の旦那に従おう。何しろカイシュンに関しては専門じゃ無いんでね』
「……なるほど」
最上が目を元に戻す。
「水臭いじゃないか、新隆くん。私もキミのキスフレになってあげるよ」
「えっ！？……いいのか？」
「嫌か？」

おもはゆそうに、はにかんで。
「最上さんと友だちかぁ……よ、よろしく？」
嬉しそうに頬を紅潮させるので、最上は一瞬天を仰いだ。
「……んん゛っ、さて、話を戻そう。直接的接触なら劣情が刺激できたから、それを機に上手く射精できると思った、と」
「実際さあ、自慰のやり方を教えて貰って、……できたから、もう安心だと思ったんだよなー……」
「色々試してみるのは偉いと思うぞ。あとはズリネタを色々変えてみるとか」
「ズリネタ……？」
「シゲオ、いわゆるオカズのことだ」
霊幻は困った顔をする。
「いやそれがさ、性的な物から１０年以上離れてたから、イマイチそういうの見ながら抜く方法が分かんなくて……」
「直接的刺激だけで射精しようとするのは……難しいんじゃないかな……」
最上が戸惑った声を上げるのを、「大悪霊を戸惑わせる霊幻めっちゃ面白いな」、とエクボがニヤニヤと見ている。
「一般的に男性は視覚的刺激で興奮する。勃起障害の場合は性行時に電気を点けるようアドバイスするぐらいだ。……まずは何か見ながら自慰をしてみたらどうかね？」
「何かって、なんだ？」
じ、と純粋に答えを求める目で見られて最上はたじろぐ。
「最上さんは何を見てたんだ？」
「わ゛っ！？たし、は、……自慰をしないから……」
「あっ逃げたぞ」
エクボがシラっと最上をさげすむ。
「追え逃すな囲い込め」
ヨシフが面白そうに口角を上げた。
「みんな酷いなあ……」
「じゃあシゲオがオカズ教えてやれよ」
「ぼっ！？く、のは、ちょっと、特殊なので……そ、そういうエクボは！？」

「あ？ふつーだよ。チチがでけー女の裸見ながらシコるだけだ」
「あっコイツ無難な嘘ついたぞ」
ヨシフがちょっとエクボを睨む。
「そういう公僕さんはどうなんだよ」
「次そう呼んだら霊体の鼻っ面ひっ掴んで引き摺り回すからな。教えるかよ、プライベートもいいとこだ」
「うわズリぃ」
「巨乳か……よし、見てみるわ！」
「お前な、そうやって気負うのやめろって……」

かちゃ……

閉めていたはずの、相談所の鍵が、勝手に回った。

「「「「！」」」」
ヨシフが立ち上がり、バスタオルを霊幻に投げ、施術室から飛び出してドアを閉めた。
「絶対開けるな！内側からつっかえ棒してろ！施術台を倒して弾除けにしろ！」
ヨシフが叫びながら煙草に火を付け、相談所のドアの横に身体を落として構える。侵入者に飛びつきやすいように。
一方施術室の中では、最上が瞬時に結界を張り、エクボが霊幻を立たせて施術台を引き倒していた。
「影山少年、なるべく強いバリアを結界の内側に張ってくれ。新隆くん、施術台の後ろに」

「ズ、ズボンを」
「馬鹿、相手がドアから撃ってきたらフルチンで死ぬんだぞ！？さっきヨシフがバスタオル渡しただろが、腰に巻いてしゃがんでろ！」
エクボが霊幻の肩を掴んで、倒した施術台の背後に回らせる。
「私の結界は防御には向いていない。ただの目眩しだ。いいかエクボ、部屋に突入されたらその依代を駄目にしてでも新隆くんを守れ」
「めちゃくちゃ言ってますね！？」
「私はプロの護衛ではない。隙をつかれたら新隆くんを護りきれんのだ。それはキミも同じだと思うがね、少年」
「……！」
茂夫はバリアを分厚くする。
「本当はヨシフくんが頼りになるのだが……いかんせん、前線に行けるのも彼しかいない。というわけで、気にせず死にたまえ。何、死にたてなら蘇生できる。安心して命を粗末にするといい。新隆くん以外はな」
「了解」
エクボは身体全体で霊幻の盾になる。人体を通過すると弾丸は殺傷能力がかなり落ちるからだ。
「蘇生をすると多少取りこぼしたり（・・・・・・・・）するからな。新隆くんに関してはなるべくそれは避けたい」
「……エクボ、後でその人の財布に多めにお金入れるわ……」

きぃ、と相談所のドアが開いた。

「霊幻さーん！近くに来たから休憩させてよ！！……あれ、何してんの？ヨシフさん」
能天気な鈴木将の声と、続いて現れた影山律の姿に、一気にヨシフは脱力した。
「……鍵が掛かってるのを念動力で開けるんじゃねえ！！不法侵入だからな、それ！！」
「えええ？だって明かりついてるし、なんかいつメンで楽しいことしてるのかな、って……思っ……」
施術室からわらわらと出てくる男たちと、腰にバスタオルを巻いただけの霊幻を見て、将の顔がこわばる。
「……能力者たちが寄ってたかって霊幻さんのズボン脱がせて何してんの……？」
将の手がスマホを取り出し、素早く１１０をタップした。
「だああ待て！この短期間で２回も通報はキツすぎる！霊幻、説明してくれ！！」

かくかくしかじか。

「ほーん、キスフレねぇ……あっじゃあ俺たちも今日からキスフレな！」
「えっ僕も！？」
戸惑う律にまあまあと将は声をかける。
「で？キスフレに隠し事しねえよなあ？霊幻さん。みんなの前でチンコ晒して何してたの？」
「……っ、実は……」

かくかくしかじかでこうでこうでこのように。

「なるほどなるほど。丁度いいオカズねぇ……。そんなの実際見せてやりゃあいいのに。とはいえあんまり過激なのは最初は良くねえって言うから、これとかどう？」
将はFANZAのアプリを開いて霊幻に見せる。
甘ったるい女優の『愛してる好き気持ちいい』と言う声。響く抽挿

音に、カッと霊幻の頬が羞恥に赤くなった。
「……っ」
「駄目だぜ、霊幻さん。みんな霊幻さんのために集まってくれてるんだから」
将の碧玉の瞳がきらりと光る。
「ちゃんと、見て？」
霊幻の目がそろりそろりとスマホの卑猥な映像に向けられる。
「ぁ……」
まぐわう男女に、霊幻は熱っぽい声を漏らした。
「催してきたら好きに抜けばいいから。……だーいじょうぶ、仲のいい友だち同士だったら、抜きっこくらい普通に良くあるから！！」
からっとした将の声に、そうなのか、と霊幻が呟く。
こっそりと、将が……支配者の顔で、舌舐めずりした。
「ど？ラブラブ物で女優が無難なの選んだけど」
「……良く、分からない、かも」
「チンピクしねえ？エロくない？」
「……えっち、だとは、思う」
ふむ、と大真面目な顔で将は悩んでみせ、次の動画を再生した。
「これ、巨乳モノな」
恥ずかしさに逸らしたい瞳を、霊幻は必死に卑猥な動画に向ける。
「……ぅ……」
ごくりと鳴る喉に、つうっと垂れる汗。
困惑と未知の世界に瞳を揺らす霊幻を、エクボが、茂夫が、ヨシフが、最上が、律が、……そして将が、じっと睨（ね）め回していた。
「……よく、分からない」
「じゃー次はコッチな。ケツがデカい女優」
「ん……」
霊幻の視線が逃げようとして、何度も動画に戻される。
「スレンダー系。足フェチ向け。ど？何となく自分の好み分かってきた？」
「おっきいの、好き、かも？」

声が小さくなる霊幻に、なんて？と将が聞き返す。
「もっとちゃんと言ってくれねえと分かんねえよ。何が大きいのがいいの？」
霊幻の視線がもじもじと足元で揺れる。
「ぉ、っぱい……」
ぽつりと溢された言葉に、ぐあっと茂夫の頭に血が昇った。師の口からそんな言葉が漏れるのは、初めてだ。
「そっかそっか。じゃあ巨乳モノのおすすめ出すわ。……なあ霊幻さん、女のアソコ、見えた方がいい？」
「え、っ」
「これ人によるんだよなぁー。ギリモザの方がいい？」
「え、と、見てみたい、かも」
「何を？」
将は笑って小首をかしげる。
「検索するから、言ってよ」
はく、と霊幻は空を噛んでから、そっと喉を唾液で湿らせた。
「おまん」
「あーっとそうだ！案外衆道がハマるかもな！？」
耐えきれなくなった最上がめちゃくちゃ不自然に霊幻の言葉を遮った。彼は案外言葉責めに耐性が無かったのだ。
ぺぺぺ、と勝手に将のスマホが動く。
「えっ何これ！？！？」
「ほら、どうだ新たか……く……」
ゲイ向けＡＶのページにはずらっと『金髪年上』の作品がおススメとして並んでいて。
「あー……」
頭を抱えた将に、察したエクボが何とも言えない声を出す。
「へえ、ゲイ向けってガイジンが多いんだな」
霊幻はのんびりとそんなことを言っている。

「あ、そうだ。そもそもさあ、お前らに自慰のやり方見せて貰えばいいんじゃね？」

無邪気にそう言う霊幻に。

「「「「「「はあ！？！？」」」」」」

彼らは叫んだ。